

# ヒューマンライフイノベーション開発研究機構 中間評価実施報告書

## 1 はじめに

お茶の水女子大学では、第3期中期目標期間（2016年度～2021年度）における基本的な目標のひとつとして、「本学の特色ある研究を活発に推進し、研究レベルの高度化と先進的な研究分野を開拓して学術と社会に貢献するために、新たな研究組織を構築し、国際的な研究拠点を形成する。第3期中期目標期間には、特に、人の発達過程における様々な課題を解決するための研究と、人が一生を通じて心身ともに健やかに暮らすための研究を推進し、その成果を社会に向けて発信する。」が掲げられ、これに基づく、中期計画及び各年度計画を策定することとなった。これにより、2016年4月に「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」が直ちに設置された。

本機構の下に、「ヒューマンライフイノベーション研究所」と「人間発達教育科学研究所」を設置し、それぞれ本学の強みを活かして、生命科学・生活科学による身体的・環境的側面ならびに人間発達科学・教育科学による精神的・社会的側面から、国内外の研究機関や企業と連携することによって、「からだ」と「こころ」の両面からの研究を推進する。また、幼児期から高齢期までの人の発達段階に即して、人が健康で心豊かに過ごし生活環境を向上させる革新的解決方策を創出し、その成果を社会に向け発信することを目標とすることとした。

2019年度においては、これらの目標を達成するための計画として、今までの成果等の検証を行うため、その中間評価の結果をとりまとめることとした。

今回の中間評価に際しては、評価委員会の開催や現時点の成果に関するシンポジウムの開催を予定したが、新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大により、中間報告書（別添参照）に基づき各委員に書面にて評価をいただく形に急遽変更することとなった。

各委員の先生方におかれては、たいへんお忙しい中協力いただき、この場を借りて感謝申し上げます。

今回の中間評価により第3期中期目標・計画を達成することはもとより、「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」が自他共に認める国際研究拠点として更に発展するためにも、今回の評価結果を踏まえた改善への取組を図ることが重要であることはいうまでもない。

## 2 評価の方法等

中間評価の実施に当たっては、本学の評価を担当する副学長（産学連携を担当する副学長も兼務）のもと、5名の外部委員を含む合計9名の委員会構成員により、あらかじめ送付された中間報告書による書面評価により行われた。

中間報告書は、機構及び各研究所の概要、構成などの資料に加え、2016年4月から2019年10月までの各研究所の研究業績、シンポジウム等の活動実績等の300ページを超える資料を各委員によりご確認いただき、1) 機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価、2) 国際的教育研究拠点形成に関しての意見、提言、3) 今後の課題についての提言、4) その他の機構の活動に関するご意見・ご提言の4つの観点でのコメントにより評価をいただいた。

## 3 評価委員からのコメント概要

各評価委員からは概ね、中間評価段階での活動実績については肯定的なコメントをいただいた。

また、さまざまな視点からの指摘や提言をいただいた。

各評価委員から寄せられたコメントの概要は以下のとおり。

### 1) 機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価

- ・研究業績や研究活動の豊かさ、国際性、研究活性化の取り組み、異分野連携による効果、附属学校等との連携、効果的な発信の6つの観点に注目し、引き続きそれぞれの観点での取り組みが期待される。
- ・お茶の水女子大学だからこそ追求、実現できる QOL の定義と将来像が示されるとよい。イノベーションをテコに、「すべての女性がしあわせな一生を送れる未来づくり」のようなより高い境地を目指してもよいのでは。進捗に関しては、年々組織が充実し、いい論文がふえてきている。
- ・ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(OHLI)主催の年次シンポジウムは、来場者から多くの肯定的で示唆的なコメントが寄せられ、好評。
- ・年次シンポジウムの開催は、各研究所の研究成果を一般に公開するための OHLI にとってたいへん有意義なイベント。2018年と2019年途中までのヒューマンライフイノベーション研究所(IHLI)と人間発達教育科学研究所(IEHD)の教員による研究業績は生産的なものであった。英語での論文は IHLI が 83 編、IEHD が 28 編出されており、これらの論文の中で、IHLI と IEHD がそれぞれ発表した 13 編と 28 編の論文は神経科学関連の研究だが、神経科学の研究領域では IHLI と IEHD の間の教員間のコラボレーショントピックとなる可能性がある。神経科学関連の研究のうちいくつかの論文は、インパクトの高いジャーナルに掲載されており評価できる。
- ・IHLI では、テーマとして、生活習慣病、炎症性疾患、発達障害を中心に展開されているが、特に研究報告は生命科学部門、食物栄養部門などが活発に行われており、いずれも優れた研究論文の報告がみられるが、中でも「大規模画像解析による脳浮腫の定量化技術の開発と環状ホスファチジン酸の効果」や、論文「食品のおいしさと健康と安全性の先進的研究体制の確立に向けて」などは今後の発展が期待される。公開シンポも活発に行われ、食生活からうつ病の治療を指向する更なる研究はその成果が期待される。
- ・両研究所はコラボレーションを考えており、それぞれのテーマに対する総合的アプローチが伺える。さらに研究体制として様々なライフステージにおける“こころ”と“からだ”に関する国際レベルの研究をより充実させることを目指しており、アクティブな研究活動がなされ、成果を生み出している。その機構の目的に沿った取組が順調に行われていると判断される。
- ・成果物であるライフステージ別 Q&A シリーズは、研究成果の社会への発信のみならず、研究成果を広く役立ててもらえることから、機構の社会貢献活動としても評価できる。
- ・2016年に機構が設置されたのち、中期計画通り、IHLI と IEHD が新設されています。IHLI は、I 期では 2 部門から 3 部門に、II 期では 6 部門に拡張され、メンバーも 10 名から 28 名（うち 16 名が女性）へと増加しており、シンポジウム概要、プロジェクト報告、研究業績からは、広い領域において、多様な現代的課題に関し、世界水準の研究成果が蓄積している。IEHD も、3 部門における 43 名のメンバー（うち 34 名が女性）がライフコースに沿った多様かつ世界水準の研究が行われており、本機構が「人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点」としての基盤を構築し、成果を蓄積し、広く国内外に発信していること、機構メンバーの女性比率からも女性研究者・リーダーの育成が着実に行われている。全体として、本研究機構と二つの研究所の進捗状況は良好であり、中間目標はたいへんよく達成されている。
- ・機構全体のシンポジウム開催など公開活動、具体的なテーマのもと多数のメンバーで実質的な研究が展開されていること、年度末成果報告会の実施、個別のシンポジウム、セミナー、イベントなど多彩な活動を行ってきたことなど全体的な進捗状況は 4 年経過後の中間評価として適切と評価。
- ・研究活性化の取り組みに関しては、他の部局や全学的な管理業務とのエフォートの調整など、研究活動に集中できる労務上の取り組みも考えられる。

- ・効果的な発信に関しては、報告会については、その趣旨や目的がやや分かりにくいとの指摘があることから更なる工夫や取り組みの充実が期待される。
- ・「これまでにない方法（イノベーションを実現する）」については、この3年半の経過では、まだその成果は見られていない。「人の年代ごとに（人間の発達段階に即した）」に関しては、個々の研究の対象は幼児、青年、成人、高齢者と各年代を含んでいるものの、研究内容がそれぞれ異なるため、それらが統合されたとしても、各年代に適合した健康と生活環境の向上のための方法にまとめられるとは思われないことから、この課題については、目的に沿った取組が行われていないと判断せざるを得ない。
- ・IHLI では、開設当初の2部門から、平成30年度より6部門に拡大・改組し、27名の学内研究員を配置して活発に研究活動を展開している。平成28年4月～令和元年10月までの学術論文数は、計161本（うち英文論文が73.9%）で、1名あたり約6本と高い水準を示している。こうした研究成果をもとに開催された各年度計3回の市民向けの公開講座には多くの企業関係者を含め計391名の参加を得ており、8回開催された共催・後援イベントの開催とともに、社会発信においても順調な活動を展開している。
- ・IEHD では、3部門に、21名の学内研究員を配置し、附属学校園関連の9名の連携研究員とともに、大学内にあるナーサリー・こども園・幼稚園・小中高校・大学・大学院を繋いだ学術的および実践的な発達教育研究を展開している。本研究所は、お茶の水女子大学が開学以来、伝統的に重視してきた子ども研究を継承発展させ、IHLI とともに、文理融合的視点から生涯にわたる心身の発達の解明とその保育・教育的応用に視点を拡大しようとしている点は、少子・高齢化が進展する我が国において時宜を得たものであると評価できる。平成28年4月～令和元年10月までの学術論文数は計173本（うち英文論文が25.4%）・著書91件で、総じて順調に研究活動が実施されてきている。各年度末の成果報告会を含め主催したシンポジウム・セミナーは11回に及び、共催・後援イベントは37件と活発である。これらのうち17件は中国やスリランカ、フィリピン、アメリカ、ドイツ、フィンランド、イギリス等幅広い国々からゲストを迎えたセミナー・シンポジウム・研究会であり、総合的・国際的な教育研究活動の展開をめざす本機構のミッションに沿ったものである。

## 2) 国際的教育研究拠点形成に関する意見、提言

- ・プロパー教員・研究員の研究遂行・論文作成上枢要な役割を果たしたと評価される活動にかぎってみると、IEHD では、スリランカの思春期児童を対象とした study を報じた Omori, Yamazaki, Aizawa 論文(2017年)ほか2編など、IHLI では、Tajima, Yanoshita, Enomoto, Saito, Iida 論文ほか21編などが国際水準にあることより評価できる。
- ・両研究所とも、多数の英文論文で成果を国際的に発表していることは評価できる。また、両研究所を合わせて、2016年度以降で科研費の研究代表者となっている専任教員が28名いることは、学术界において評価されていることを示すもので、研究力を示すものと評価できる。これらのことから、国際的研究拠点としての活動は行われているものと評価される。
- ・国際的教育研究拠点としての達成度は、国際共同研究や国際発信、外国研究者や留学生の受け入れや国際交流、グローバルな視点での研究内容等により推定できるものと思われるが、中間報告書の研究業績から、両研究所ともに、国外研究者との共同研究、国際誌や国際シンポジウムでの発信等が積極的に行われており、世界水準の研究活動が進展していることが確認できた。また、研究内容も、グローバルかつ喫緊の課題とともに「茶、米、納豆」などの日本を意識した研究や、OECD、欧米、アフリカ、東南アジアを対象とする、国際的視座をもつ多様な研究が多数行われており、国際的教育研究拠点としての地盤が固まりつつある。以上より、本機構の「国際的な教育研究活動」や「海外機関と連携した世界水準の国際拠点」の構築についても良好な達成水準にある。
- ・ヒューマンライフイノベーション研究所では多数の構成員のもと、多くの研究論文が国際誌に掲載されており高く評価できる。国際学会発表や招待講演の状況も同様。今後も一層活発に進めることが望まれる。IEHD についても国際的な研究活動に関しては前述と同様。加

- えて、多彩な国際的活動（海外訪問団受け入れ2件、国際シンポジウム／セミナー7回）は高く評価できる。以上のことから国際的な教育研究拠点が形成されつつあると判断できる。
- ・国際化という視点では学会参加、シンポジウム開催などによる交流は見られているが、さらに進んで両国の学生間のある一定の期間の直接交流（海外へ、海外から）、文化融合の交流も必要であり、それらの研究成果が多角的に示されるべき。“文化融合”とは具体的にどのようなことを指しているかを述べた方がわかりやすい。
  - ・国際的教育研究拠点として確たる評価を得るためには、当機構の研究実績や活動を充実させていくことはもちろん、海外の他機関などに対して当機構に注目させる働きかけを行っていくことなども有用。
  - ・機構の IHLI と IEHD どちらの研究所もバイオサイエンス分野の研究に属しているそれぞれ大学院生の2つの学習指向グループがあるが、IHLI は実験系研究指向、IEHD は非実験系研究指向。この2つのグループの学生に対して、学際的な研究(例えば、基礎人工知能、脳科学など)の実施をすることが可能。学際的な教育研究により、大学院生が研究範囲を広げるのに役立つ可能性がある。
  - ・国際化拠点形成を通じて何を求めているのかを具体的に述べる必要がある。
  - ・海外の当該分野の発達しているところを分析して吸収するとしたら、ぜひ日本人と海外との密なる交流（学生レベルでも教員レベルでも）が必要。日本と海外をミックスした教育システムプログラムを創り、物的、人的国際交流を図るべきで、例えば、お茶大キャンパスの機能を海外の大学内キャンパスに設置し教育研究する場を設定する一方、お茶大のキャンパスに海外大学のキャンパスを作るなどが考えられる。現在交流のある大学がお茶大キャンパスに交流拠点をすることもひとつの案。交流を通じて日本の文化、研究をどのようにして世界に伝えて理解を進めていくかというための具体的な方法が求められる。
  - ・海外の研究者と連携した共同研究を計画、実施できれば、国際的研究拠点としての評価はさらに高くなると思われる。
  - ・教育拠点に関しては、公開シンポジウム等の活動は見られるものの、人材育成にまで至っているかは、報告書に記載がなく不明。なお、大学院生が機構に属する教員から研究指導を受けていることもあるのではないかと思われ、留学生を含む大学院生が機構内の研究に関与している状況が示されるならば、国際的教育拠点としての活動がある程度示すことができるのではないか。
  - ・機構全体として企画された国際シンポジウム（2020年3月：中止）については、良い機会なので予定された内容を資料（日・英）などに纏められウェブ上で公開されることが望ましい。
  - ・両研究所ともに各研究員のレベルでは海外研究者との共著論文が公刊されており、IEHD では国際シンポジウム・セミナー等も活発に実施されていることから、国際的な拠点形成に向けた一定の進捗はなされている。しかし、組織レベル（各研究所あるいは機構全体）での海外との教育・研究の交流は今後の課題であり、“生涯にわたるこころとからだの健康イノベーション”という本機構の目的と方向性を同じくする海外の大学や研究機構との連携を図っていくことが必要。

### 3) 今後の課題についての提言

- ・最終評価においては、取り組みの継続や充実により、更なる成果が上がっていることが望まれる。
- ・お茶の水女子大学は生命・生活・教育科学の分野で、他に類を見ない教育研究の実績とポテンシャルを持っており、研究所・部門・分野それぞれの持ち味と強みを活かした機構内外の協同研究のさらなる推進によって、お茶の水女子大学ならではのプラスアルファが香るイノベーションを生み出してほしい。Anxiety 様行動の成因や BBB breakdown 制御に関する生化・代謝部門の研究、その成果が Clin Nutr ほかであらわれてきている栄養科学部門の横断研究、人間発達基礎・保育教育実践研究部門の国境を超えた調査研究など、今後の発展が注目される。貴機構全体として、世代を超え、歴史に残る将来を見据えた研究

(prospective study) の推進も期待したい。

- 日本における高齢化に伴い、栄養医学や老人栄養などの研究分野が重要になってきたことにより、IHLI の栄養科学部門・食品科学部門・代謝部門の統合プログラムが形成されると良い。例えば、この統合プログラムは、心血管疾患と非アルコール性脂肪肝炎 (NASH) に関する研究に焦点を当てたものなどもよいのではないか。さらに、IHLI における基礎的な脳科学研究の出版物 と IEHD で開発中の子供の認知研究はたいへん生産的で印象的。
- この2つの研究所間には、まだギャップがあるように感じる。外部からの脳機能イメージング研究チーム(例えば fMRI、EEG など)を含めた取り組みを行うことなどにより、将来的に異なる精神および神経疾患の研究において IHLI と IEHD の間のより多くの共同研究が促進されると考えられる。
- 現在の活発な活動を更に続けていくことが望まれる。
- 今後、必要となることは、2つの研究所の成果を機構の目的に沿って統合していく活動と思われる。そうした活動には、①機構の目的全体を具現化した総合的な成果としてまとめる方向と、②特定のテーマに特化して深化した成果を出す方向の2つがあるとよい。機構としては、前者は必須の活動であるが、後者はオプション的な活動。
- 2つの研究所の研究教育活動については、両者が有機的に結びついた研究教育活動が見られていない。両研究所のパンフレットでは、全く同じ目標(健やかな育ち・活力ある暮らし・元気な老い)が記載されていることから、両者が連携した活動がひとつも示されていないことには違和感がある。公開シンポジウム参加者の感想でも、研究成果を評価する声がある一方で、機構全体としてのまとまりが感じられないとする意見も見られている。2つの研究所のこれまでの研究活動を概観すると、例えば、「食」と「生活習慣病」をキーワードに連携した教育研究活動を行える可能性があるように思われる。生活習慣病に関連する主な要因として、食事、運動、睡眠、ストレス、喫煙・飲酒などがあげられているが、これら要因の中で食事・食品に関しては、両研究所で研究実績があり、それらを融合させた研究教育活動を検討してみるのはいかがでしょうか。食の要素を中心とした生活習慣病への対応とその科学的根拠を、幼児期から老年期までの発達段階ごとに整理しまとめあげるならば、個々の研究者の活動ではなく、機構の成果として評価されるのではないかと。
- 研究成果の社会への発信媒体として、この Q&A シリーズの定期的発行を計画していることは評価できるが、各シリーズの年代の区分で子どもの次がすぐに成人期となっていることには少し無理があるように感じられる。「青年期」を入れることを検討いただきたい。
- 「人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーション」という目標に照らせば、シンポジウムなどに見られる分野間連携をさらに進め、各研究分野のより踏み込んだ交流や融合的な研究、例えば、IHLI の6部門間の共同研究や、IEHD における実践・基礎・臨床の横断的研究の活性化に期待が募る。ディシプリンの異なる研究分野の共同は常に困難を伴うが、すでに達成されている機構の融合的な交流はそれを可能にし、拠点のさらなる展開をもたらす。大学院生、学部生を積極的に巻き込むことで、広い視野をもつ次世代リーダーを育成することができ、機構の教育拠点としての機能も強化できる。
- 「海外機関と連携した世界水準の国際拠点」という目標に照らせば、本研究機構のメンバーに外国人研究者やポスドク、大学院生を迎え入れ、また、諸国の同じ目的をもつ研究機関との研究交流をさらに活性化することが期待される。こういった活動は、お茶の水女子大学の大学協定・交流(Overview 2019-20 より)ですすでに行われていると思われるが、本機構独自の活動としても推進することで、「世界水準の国際教育研究拠点」としての位置づけが強化される。
- 本機構の目的の達成度を測定する上で、いくつかの指標を追加してもよい。中間報告書からも本研究機構の研究教育活動、女性リーダーの育成、世界水準の国際拠点等の達成度は読み取れるが、加えて研究者のジェンダー比率を年齢や職位別にカウントする、学生の業績も明記する、外国人メンバー、外国人研究者・ポスドク・院生等の受け入れに関する資料等も提示する等により、より一層、多側面からの評価が可能になる。
- 多数のシンポジウムは面白く魅力的であり、参加者にもたいへん好評でしたが、参加者の約7割は女性であり、学生、大学職員が多いことから、学外への発信が十分に行われていない可能性がある。たいへんもったいないことですので、さらなる発信(場合によっては

動画配信等)も行われるとよい。

- ・機構全体、IHLI、IEHD、いずれも4年経過した現在、国内外において、順調に、目的に沿った成果を挙げ発展していると判断できる。今後も同様のペースで進めて頂ければ。
- ・イノベーションの語は新しいものを創ることに留まらない。社会への普及をもって完遂することを考えれば、今後、これらの研究成果をベースに、(人材育成を含めた)社会普及への様々な道筋(つまるところ(これまで関心のなかった)世間の耳目を集め、非アカデミアからの資金流入)を探ることも意義がある。
- ・今後、本機構での先端的な研究や啓発活動を、学生・生徒の教育にどのように活かしていくかが課題。ワンキャンパスにナーサリー・こども園・幼稚園・小中高校・大学・大学院が同居している利点を活かし、児童・生徒・学生とその家族、教職員を対象とした幅広い生涯教育拠点としての活動を開発し、展開していくことを期待したい。
- ・“生涯にわたるところとからだの健康イノベーション”という本機構の目的と方向性を同じくする国内の大学や研究機構、民間企業との連携について、組織レベル(研究所・機構全体)での定常的な交流や共同研究の実施が図られていくことが望まれる。その際には、メンバー個々の研究や研究所内のプロジェクト研究、また両研究所が協働して実施している研究(「女子青年における食生活と心身の健康に関する縦断研究」)の成果を精査・整理し、発展性のあるテーマを抽出したうえで、外部との連携を推進していくことが望まれる。

#### 4) その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

- ・当機構内部における自己評価やそれを踏まえた今後の取り組みに関する議論は重要と考えられる。今回の外部評価などに基づき、さらに検討が進むことが期待される。
- ・大学に在籍する大学院生はIHLIで121人、IEHD169人となっているが、この2つの研究所に在籍する留学生の数が示されていない。留学生の割合は、重要な国際化指標のひとつ。また、業績の審査においては、SCI論文と非SCI論文を別々に分類していただけるとこれら2つの研究所の教員の研究成績を評価する際にレビュー担当者にとってより分かりやすい。
- ・次世代の育成という点からも、もう少し学生が主体となるテーマ、活動などがみられることも必要に思われる。特に国際交流の場に活動が出てくることが必要と思われる。
- ・新しい方法の構築(イノベーション創出)のために、特定のテーマに限定した協働研究を検討することもよいと思われる。お茶の水女子大学という特色も踏まえるならば、青年期女性における生活習慣病予防対策の構築というテーマも考えられるのではないだろうか。青年期の人たちに適切な保健行動を行ってもらうためには、知識の要素だけでは難しいと思われ、この年代の人たちにとって意味的価値を持つような対策を提示することが求められる。その意味で、対象を青年期女性に特化することは、意味的価値を考えやすくなることにつながり、これまででない対応策を生み出せる(イノベーション創出)可能性が高くなるものと思われる。女性に特化した研究であっても、その成果は、男性への対策の検討にも参考となると思われる。このような視点に立ち、可能な範囲で2つの研究所が協働して研究教育活動を行うことを期待したい。
- ・発達障害のある子どもや青年を対象とした生活習慣病予防も特化したテーマのひとつとなり得ることを指摘したい。発達障害のある子どもや青年では肥満が多いことが知られている。発達障害のある人が肥満となりやすい要因は複数あるが、どの要因に、どの時期に、どのように介入したらよいか、ということに関しては、よく分かっていないことが多い。機構として、もし、余裕があるならば、取組を期待したい。
- ・IHLIの目的(人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発及び安全・安心な社会環境構築)も、IEHDの目的(人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究及び調査)も、その達成には、子どもの発達や、家族の健康・安全を支える役割を担ってきた女性ならではの視座や洞察、また、研究・教育活動を支えるお茶の水女子大学の「女性のライフスタイルに即した支援体制」(中期目標)が不可欠であると改めて思いました。このユニークな特色・強みがあますことなく活かされ、本機構が国際的な教育研究拠点として今後さらに発展していくことを期待したい。

- ・教育プログラムに関して、東大や筑波大では、次世代リーダー育成プログラムとして、「東京大学 エグゼクティブ・マネジメント・プログラム」、「筑波大学 STEAM リーダーシッププログラム」などの取り組みがある。既存の学問では解決が難しい課題に対してどのように取り組むかがポイントとされるように見受けられる。SDGs も同様だが、「ヒューマンライフ」分野もどのあたりを目指すかで変わってくる。
- ・お茶の水女子大学には、グローバル女性リーダー育成機構の2つの研究所（グローバルリーダーシップ研究所・ジェンダー研究所）や理系女性教育開発共同機構、サイエンス&エデュケーションセンター、また新たに設置された文理融合 AI・データサイエンスセンター等、本機構と関連性の深い研究教育活動を行っている組織が存在する。今後、こうした学内の諸組織との共同シンポジウムの開催や共同研究の実施等、交流を深めていくことも大学全体の研究教育活動の活性化につながる。

\*各委員のコメントは、事務局により表現の統一などによる加筆を行っている。

#### 4 最終評価に向けて（今後の課題）

今回の中間評価については、当初、各評価委員にご参集いただき、当機構、各研究所の概要説明やそれぞれ特徴的な取り組みをご説明させていただいたうえで委員間での議論を踏まえて評価いただく予定であったが、実際には、1) 機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価、2) 国際的教育研究拠点形成に関する意見、提言、3) 今後の課題についての提言、4) その他の機構の活動に関するご意見・ご提言の4つの観点でのコメントを内外の専門家からなる評価委員からコメントを寄せていただく形で実施した。

それぞれ4つの観点において、各委員とも当機構の設立以降の活動に関して一定の評価をいただき、引き続き目的に沿った活動を継続することが望ましいとのコメントを頂いた。

また、両研究所の有機的連携、分野間の連携、研究テーマの設定など研究活動面での指摘や大学院学生や留学生など人材育成面での活動への言及など幅広い示唆に富むコメントが多く寄せられた。また、評価プロセスでの改善点として、事前にご確認いただいた報告書の内容として十分でなかった点などについてもご指摘いただいたが、第3期中期目標・中期計画期間中の最終的な評価に向けて改善すべき点等について各委員のコメントを踏まえるとともに、設立時の目的等に沿ったさらなる活動の充実や情報発信などさらに当機構が発展充実に努めるとともに、今般の新型コロナウイルス感染症の拡大による環境変化など、将来的な社会のありようも踏まえ、本学の強みを生かした機動的な活動にも留意してさらなる教育研究の充実発展に寄与していくこととしたい。

(中期計画項目 (抜粋))

○研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所)を新設し、国際的に評価される研究成果を世界に発信する拠点として、人が生涯を通じて健康で心豊かに過ごすための研究・開発、乳幼児教育・保育の実践研究、人間発達基礎研究、養育環境と子供の発達に関する長期追跡研究や発達臨床支援研究、防災・減災を含む安全・安心な社会環境構築のための研究・開発を行う。【K17】(戦略性が高く意欲的な計画)

○教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所)を新設し、人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーション実現のための世界水準の研究拠点を構築する。【K47】(戦略性が高く意欲的な計画)

お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構外部評価の観点(案)

1. 機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価
2. 国際的教育研究拠点形成に関する意見、提言
3. 今後の課題についての提言
4. その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

(参考)

(ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の目的)

人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点として、お茶の水女子大学におけるこれまでの教育研究の実績や人材育成の経験を活かし、更に発展させるよう総合的、国際的な教育研究活動を行う。

(ヒューマンライフイノベーション研究所の目的)

人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発及び安全・安心な社会環境構築のためのイノベーションを創出する国際研究拠点を構築するとともに、成果に基づいた教育プログラムを策定し社会に還元する。

(人間発達教育科学研究所の目的)

人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究及び調査を行い、国際研究拠点を構築することを目的とする。

国立大学法人お茶の水女子大学  
ヒューマンライフィノベーション開発研究機構評価委員会

2020年2月17日現在

森 田 育 男	評価を担当する副学長 産学連携を担当する副学長	第3条第1項 第3条第2項
菅 原 ますみ	基幹研究院長	第3条第3項
坂 元 章	総合評価室長	第3条第4項
山 本 博	公立小松大学長 (外部有識者)	第3条第5項
Chang Wen-Chang	台北医学大学理事長 (外部有識者)	第3条第5項
齋 藤 康	千葉大学名誉教授 (外部有識者)	第3条第5項
宮 本 信 也	白百合女子大学発達心理学科 学科長 (外部有識者)	第3条第5項
仲 真紀子	立命館大学心理学部教授 (外部有識者)	第3条第5項
太 田 裕 治	基幹研究院自然科学系教授 その他学長が必要と認めたもの	第3条第6項

中間評価タイムスケジュール

2019年6月	第1回ヒューマンライフィノベーション開発研究機構会議 中間評価実施について検討開始（実施方法等の方向性検討）
11月	第5回ヒューマンライフィノベーション開発研究機構会議 評価スケジュールの確認、外部評価委員候補者の検討等  外部評価委員候補者への打診・内諾
12月	学長戦略機構会議にて開催概要の報告 外部評価委員に対する委嘱手続き

2020年1月	第6回ヒューマンライフィノベーション開発研究機構会議 評価スケジュール等の確認
2月	新型コロナウイルス感染拡大により、国外からの外部評価委員の 渡日を中止とし、書面評価として依頼することとした  各評価委員へ中間評価報告書（審査資料）を送付  新型コロナウイルス感染拡大により、全ての委員に書面審査と して依頼することについて確認・了承 *コメント回答締め切りを3月24日までとした
4月	各評価委員よりコメント票回収・とりまとめ  中間評価報告書（案）の作成
5月	中間評価報告書（案）の学長戦略機構会議への報告  中間評価報告書の公表